

メトロポリタン史学会編『二〇世紀の戦争』を出版して

白川 耕一

二〇一〇年四月に開催されたシンポジウム「二〇世紀の戦争―その世界的位相」の報告集である、「二〇世紀の戦争―歴史的位相」が二〇一二年七月に有志舎より出版された。あらためて本書を読み直すと、本書では、グローバルな視点から見た第一次世界大戦、第二次世界大戦末期の軍民間の境界の動揺、平時における軍備構想、音楽家による平和運動が扱われている。戦時期に限らず、平和な時代においてさえも、戦争の影響やその影にさらされ続けた二〇世紀を問うのにふさわしい論文集になっていると思う。執筆者の方々にはお礼申し上げますとともに、本書が一冊でも多く売れ、本書を世に送り出してくれた有志舎にご迷惑がからなければと願っている。

本書の序文を執筆したり、編集したりする作業に触発され、ドイツ現代史を専門とする筆者は、二〇一一年度に、「第二次世界大戦とドイツ社会」と題した講義をおこなった。私の説明が図式的すぎたためかもしれないが、学期末の筆記試験の答案を見ると、「迫害」、「殺害」、「搾取」などの言葉がちりばめられた、いかにもナチス・ドイツ史らしい(?) 紋切型の解答が散見された。そこで、二〇一二年度前期に独ソ戦を論じる際には、戦争犯罪が発生する過程を丁寧にとり、ドイツ側だけでなく、被占領者の動向にも注意を払うことにした。

講義の構想を練る際の手がかりとなったのは、東欧史家ティモシー・スナイダーによる『流血の大地―ヒトラーとスターリンとの間のヨーロッパ』⁽¹⁾である。スナイダーは、現在のポーランド東部から白ロシア、ウクライナまでを含み、

北はバルト諸国から南はクリミア半島に至る空間を「流血の大地」と見なす。この「流血の大地」とは、ヒトラーによる侵略とスターリンの政策とが出会う場であり、一九三〇年代から五〇年代初めにかけての一連の政治的な殺害（ウクライナの飢餓（一九三二～三三年）、スターリンの大粛清（一九三七～三八年）、ドイツ、ソ連両国によるポーランド占領（一九三九～四一年）、ドイツ占領下での搾取（一九四一～四四年）、ホロコースト、ドイツ系住民の追放（一九四四～四五五年））によって一四〇〇万人が命を失ったという。一四〇〇万人の犠牲者を、ヒトラーとスターリンとの政策との相互関係で描こうとするスナイダーは、大量殺害がしばしば一国的に語られがちなものに対し、開かれた空間の中で、殺戮の連関を読み解こうとする。彼の言葉で言えば、「殺害の要因は国境の外からやって来て、殺害の影響は国境を越えてすすんでいく」のだった。

その例の一つは、独ソ開戦直後に多発した、現地住民によるユダヤ人迫害事件である。現地人の反ユダヤ人暴動が生じたのは、独ソ不可侵条約の秘密議定書に基づいてソ連軍が占領し、社会構造の大転換が生じていた場所であるとスナイダーは指摘している（一九六頁）。例えば、一九四〇年六月にソ連に併合されたリトアニアである。独ソ戦が始まった後、一九四一年六月二四日午後、首都カウナスでは反ユダヤ主義暴動が発生し、三日間で三五〇〇人のユダヤ人が殺害された。殺害現場には、多くのリトアニア人観衆が集まり、ユダヤ人が殴打されるたびに歓声があがり、殺害の合間にリトアニア国歌を演奏する者もいたという。ソ連によるリトアニア併合の責任はユダヤ人にあると見なされ、リトアニア国家再建とユダヤ人迫害は結びついていたのだ。実証研究に基づいた歴史叙述という点では、「流血の大地」は成功していないが、二〇世紀ヨーロッパの歴史に新しい枠組みを与え、東欧史を見直す契機となるのではないだろうか。

東西間の冷戦終了後の一九九〇年代以降、西側の研究者が東ヨーロッパやロシアなどの文書館に容易にアクセスできるようになったことによって、ソ連占領史研究が飛躍的に進んだ。分析視角も、「支配者―被支配者」という単純な図式ではなく、戦争に関わった個々のアクターが詳細に検討されるようになった。例えば、軍、警察、兵士、犠牲者、男女間の経験の違いが注目されている。独ソ開戦に先立ち、ヒトラーは来るべき戦争が「異なる世界観を持つ国家の間の世界

観戦争」になり、容赦のない「絶滅戦争」になると予言したことは良く知られている。しかし、ドイツ人研究者クリスチャン・ゲルラッハによれば、独ソ開戦直後の短い期間だったとはいえ、ドイツ軍はバルティザン活動に対して必ずしも周辺住民の皆殺しというような過酷な報復措置を採らなかつたようである。⁽⁵⁾一九四二年に入るとドイツ側の抑圧は格段に強化されたとはいえ、独ソ戦が「絶滅戦争」に至る過程の分析も必要とならう。

戦争や占領の場を考えるならば、被支配者の姿も視野に入れなければならない。一九四一年秋から一九四三年末までドイツ軍の占領下におかれたウクライナについて、オランダ人歴史家カレル・C・ベルクホッフが社会的視点から研究を発表している。⁽⁶⁾彼は、ウクライナ人だけでなく、ポーランド人、ユダヤ人、ドイツ人もいる占領の現場を明らかにしたかたと述べる。ベルクホッフの叙述では、ウクライナ人とポーランド人との間の民族対立が強い印象を残す。ウクライナの西部ヴォルギーニ地方には二五万人のポーランド人がいたが、一九四三年春から翌年にかけて、ウクライナ人ナシヨナリストはポーランド人をウクライナから駆逐することを意図し、その結果、一五〇〇〇人以上のポーランド人が殺害された(二八六頁)。

第二次世界大戦後のウクライナでは、「ナチスに抵抗したウクライナ人」という公式の歴史像の下、ナチ占領統治下に住んでいたこと自体が「裏切り」行為とみなされ、占領時代に関するウクライナ人の証言も正当に理解されなかつた(三〇六頁)。ベルクホッフによれば、かつてポーランド人殺害の現場となつた村落において、ようやく二〇〇〇年になつてウクライナ人とポーランド人との和解が始まつた(二九九―三〇〇頁)。

このように見てくると、独ソ戦の実態が私たちの視野に入ってきたのはほんの三〇年ほどの間ということにならう。それは、単に史料アクセスの問題にとどまらない。新しい問題設定や、独ソ間に埋没し、忘れ去られた人々や複雑な諸関係に対する関心が生まれてきたからかもしれない。方法論を再点検しながら、私たちは二〇世紀の戦争の歴史に向き合うことが必要であらう。

注

- (1) Timothy Snyder, *Bloodlands: Europe between Hitler and Stalin*, New York 2010.
- (2) Konrad Kwiet, *Rehearsing for Murder: The Beginning of the Final Solution in Lithuania in June 1941*, in: *Holocaust & Genocide Studies*, 12 (1998), pp. 12, 13. (ウクライナ西部の都市)におけるウクライナ人とポーランド人との対立、ユダヤ人の殺害を扱った研究として、『野村真理』ガリツィアのユダヤ人―ポーランド人とウクライナ人のはざままで―(人文書院 二〇〇八年)がある。『流血の大地』の書評として、Jürgen Zarusky, Timothy Snyders "Bloodlands": Kritische Anmerkungen zur Konstruktion einer Geschichtslandschaft, in: *Vierteiljahrshefte für Zeitgeschichte*, Jg. 60 (2012), S. 1-29.
- (4) Dieter Pohl, *Die Herrschaft der Wehrmacht. Deutsche Militärbesatzung und einheimische Bevölkerung in der Sowjetunion 1941-1944*, Frankfurt (M) 2011, S. 11.
- (5) Christian Gerlach, *Kalkulierte Morde. Die deutsche Wirtschafts- und Vernichtungspolitik in Weißrußland 1941 bis 1944*, Hamburg 1999, S. 870-875.
- (6) Karel C. Berkhoff, *Harvest of Despair: Life and Death in Ukraine under Nazi Rule*, Cambridge/ London 2004.

付記：朝日新聞(二〇二二年八月二日)の書評欄で、山室信一氏が本書に言及している。